

林 宇欣  
LIN Yuxin



生生

水性絵具、墨、オイルパステル、和紙、パネル

## 生生

死は万物の唯一の終局である。この世に生を受けた者は必ず滅び死ぬものであり、人生は無常だ。今のところ、私たちは生の状態を維持しているが私たちは死と共に歩むのである。ドイツの哲学者マルティン・ハイデッガーは「人は、いつか必ず死ぬということを思い知らなければ、生きているということを実感することもできない。」と言った。死に向かうことは、すなわち生きることである。私たちは死を意識すると共に生きている状態を尊重する必要があるのだ。

この作品は青木ヶ原樹海を背景にして人間の生命に対する理解を表現している。青木ヶ原樹海に樹齢300年と記された榎(ツガ)が現存していた。現時点で人類の平均寿命は75歳くらいだ。人間の小ささは、樹海にいる時に実感することができる。樹たちと向き合う時、感情を超えた生命の力を感じることができる。樹海の中に根を張ることができずに横へ横へと伸びている、むき出しになった根や朽ちた樹の姿も綺麗だ。樹海の中へ心が浄化されていくような感じがある。

選べるなら、樹海のような場所で人生を終えたい。「落葉归根」という中国の四字熟語がある。葉は落ちて根もとに帰って、何事も結局はもとに帰る意がある。人間も同じく、死後、肉体は自然に還る。この熟語は万物の自然回帰を象徴している。

私は、死後も肉体がその下の植物を養い生命の循環を再び感じることができるように思う。成長する木の根も絡み合って一つの体となり、傷んだ肉は崩壊して自然の循環に加わるイメージを持っている。

修了制作では樹海の中に横たわる枯れたひまわりを描いた。倒れたひまわりは、静止状態ではあるが生きている。静止した状態で時間は流れ、外の世界を探し結びつく。枯れ枝は人間の胴体に似て森の中で静かに伸びをする。白い苔が、枯れたひまわりと樹海の木の間をつないでいる。白い苔は「私」と「樹海」をつなぐ小さな命を表している。

この作品は、四曲一隻の屏風で表現されている。屏風は置き方によって画面の角度を変えることができ、見る人を包み込むこともできる。より没入して作品を楽しめるように、作者の創り出す世界に入り込むことができるようにした。植物たちの柔らかい雰囲気と静的で霞のような美しさを表現するために和紙に水性絵の具で描いている。

これからも生に対する感謝と尊敬の念を忘れないように制作を続けていきたい。